

1. (1) $p = q = 0, r = ad - bc.$

(2) $\mathbf{u} = (-2, -3, -1).$

(3) $x = y = z$ となるすべての $\mathbf{u} = (x, y, z).$

(4) $\mathbf{u} = (\pm 1, 0, 0).$

(5) $\operatorname{div}(\operatorname{grad}(h)) = (a^2 + b^2 + c^2)e^{ax+by+cz}.$

2. (1) $\operatorname{grad}(f)(\mathbf{u}) = 2 \begin{pmatrix} x-3 \\ y+2 \\ z-1 \end{pmatrix}$ である. これが $\mathbf{0}$ となるのは $\mathbf{u} = (3, -2, 1)$ のとき.

(2) $f(x, y, z) = (x-3)^2 + (y+2)^2 + (z-1)^2 - 14$ である, $f(3, -2, 2) = -13$ だから $(3, -2, 2) \in S$, よって $S \neq \emptyset$. また $f(3, -2, 1) = -14 \neq -13$ だから $(3, -2, 1) \notin S$ であり, (1) と合わせると, S 上 $\operatorname{grad}(f) \neq \mathbf{0}$ であることがわかる. よって S は曲面である.

(3) $T_{\mathbf{v}}S$ は $\operatorname{grad}(f)(\mathbf{v}) = 2 \begin{pmatrix} a-3 \\ b+2 \\ c-1 \end{pmatrix}$ に直交し $\mathbf{0}$ を通る平面だから, $(a-3)x + (b+2)y + (c-1)z = 0$ で表される.

(4) $\mathbf{w} = (a, b, c) \in S$ とし, $\begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 2 \end{pmatrix} \in T_{\mathbf{w}}^{\perp}S$ とする. $T_{\mathbf{w}}^{\perp}S$ の基底として $\operatorname{grad}(f)(\mathbf{w}) (\neq \mathbf{0})$ を取れるから, $k \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a-3 \\ b+2 \\ c-1 \end{pmatrix}$

をみたく $k \in \mathbb{R}$ が存在する. $\mathbf{w} \in S$ より $(a-3)^2 + (b+2)^2 + (c-1)^2 = 1$ だから $4k^2 + (-k)^2 + 4k^2 = 1$, よって $k = \pm \frac{1}{3}$. 従って $\mathbf{w} = \left(\frac{11}{3}, -\frac{7}{3}, \frac{5}{3}\right)$ または $\left(\frac{7}{3}, -\frac{5}{3}, \frac{1}{3}\right)$.

(5) S は $\Omega = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3 \mid (x-3)^2 + (y+2)^2 + (z-1)^2 < 1\}$ を囲む. \mathbf{V} は Ω 上定義される. S の向きに注意すると, Gauss の発散定理から

$$\int_S \mathbf{V} \cdot d\mathbf{S} = \int_{\Omega} \operatorname{div} \mathbf{V} \, dx dy dz = 3 \int_{\Omega} dx dy dz = 3 \cdot (\Omega \text{の体積}) = 4\pi.$$

3. (1) $\partial_- S = \{(x, y, -1) \mid x^2 + y^2 = 2\}$ である. 左下図より $\mathbf{l}(t) = \begin{pmatrix} \sqrt{2} \cos t \\ -\sqrt{2} \sin t \\ -1 \end{pmatrix}$. (答は他にもあります)

(2) $\operatorname{rot} \mathbf{V} = \mathbf{0}$.

(3) \mathbf{V} は \mathbb{R}^3 から z 軸を除いて得られる領域 Ω で定義される. $S \subset \Omega, \partial S = \partial_+ S \cup \partial_- S$ であるから (左下図参照), Stokes の定理と (2) より

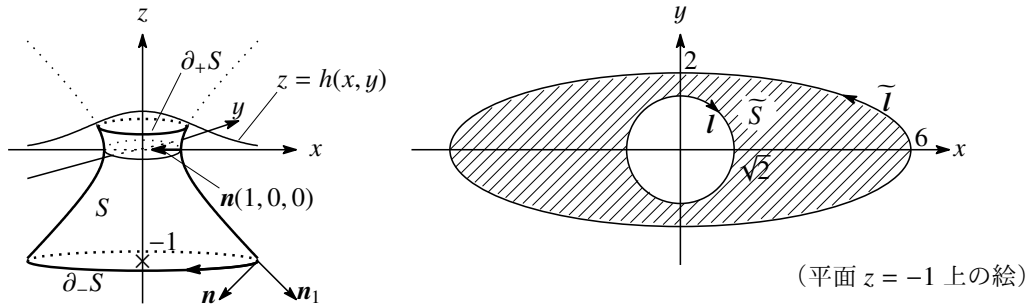
$$\int_l \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l} + \int_m \mathbf{V} \cdot d\mathbf{m} = \int_S \operatorname{rot} \mathbf{V} \cdot d\mathbf{S} = 0. \quad (\text{a})$$

$\tilde{S} := \{(x, y, -1) \in \mathbb{R}^3 \mid x^2 + y^2 \geq 2, (x/6)^2 + (y/2)^2 \leq 1\}$ とおくと \tilde{S} は境界つきコンパクト曲面で (右下図参照), $\tilde{\mathbf{n}}(\mathbf{u}) := (0, 0, 1) (\forall \mathbf{u} \in \tilde{S})$ により向きを与えると, $\partial \tilde{S}$ は向きも込めて l と $\tilde{l}(t) := (6 \cos t, 2 \sin t, -1)$ で表される. $\tilde{S} \subset \Omega$ だから, Stokes の定理と (2) より

$$\int_l \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l} + \int_{\tilde{l}} \mathbf{V} \cdot d\tilde{\mathbf{l}} = \int_{\tilde{S}} \operatorname{rot} \mathbf{V} \cdot d\mathbf{S} = 0. \quad (\text{b})$$

(a), (b) から

$$\int_m \mathbf{V} \cdot d\mathbf{m} = \int_{\tilde{l}} \mathbf{V} \cdot d\tilde{\mathbf{l}} = \int_0^{2\pi} \mathbf{V} \begin{pmatrix} 6 \cos t \\ 2 \sin t \\ -1 \end{pmatrix} \cdot \frac{d\tilde{\mathbf{l}}}{dt}(t) dt = \int_0^{2\pi} \frac{1}{36(\cos^2 t + \sin^2 t)} \cdot \begin{pmatrix} -2 \sin t \\ 6 \cos t \\ 0 \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} -6 \sin t \\ 2 \cos t \\ 0 \end{pmatrix} dt = \frac{2\pi}{3}.$$



4. (1) $\text{div}(g \cdot \text{grad}(f)) = \text{grad}(g) \cdot \text{grad}(f) + g \cdot \text{div}(\text{grad}(f)) = \text{grad}(g) \cdot \text{grad}(f) + g \cdot \Delta f$ だから、 S の向きに注意して Gauss の発散定理を使うと

$$\int_S (g \cdot \text{grad}(f)) \cdot d\mathbf{S} = \int_\Omega \text{div}(g \cdot \text{grad}(f)) \, dx dy dz = \int_\Omega (\text{grad}(g) \cdot \text{grad}(f) + g \cdot \Delta f) \, dx dy dz.$$

- (2) (1) で $g = f$ の場合を考えると

$$\int_S (f \cdot \text{grad}(f)) \cdot d\mathbf{S} = \int_\Omega (|\text{grad}(f)|^2 + f \cdot \Delta f) \, dx dy dz.$$

$f|_S = 0, \Delta f|_\Omega = 0$ であることから

$$0 = \int_\Omega |\text{grad}(f)|^2 \, dx dy dz.$$

$|\text{grad}(f)|^2 \geq 0$ だから、 Ω 上いたるところ $\text{grad}(f) = \mathbf{0}$, つまり $\partial_x f = \partial_y f = \partial_z f = 0$ であることがわかる. よって f は Ω 上定数である. $S (\subset \Omega)$ 上 $f = 0$ だから、 Ω 上 $f = 0$ である.

補足.

- (1) は左辺 = $(ad-bc)\mathbf{u} \times \mathbf{v}$ であることと、 $\mathbf{u}, \mathbf{v}, \mathbf{u} \times \mathbf{v}$ が 1 次独立であることを使う. (2) の $\text{div} \mathbf{V} = (x+2)^2 + (y+3)^2 + (z+1)^2$, (3) の $\text{rot} \mathbf{W} = (z-y, x-z, y-x)$, (4) の $\text{grad}(f) = \frac{(1-x^2+y^2+z^2, -2xy, -2zx)}{(1+x^2+y^2+z^2)^2}$. (5) は $\text{div}(\text{grad}(h)) = \Delta h$ と $\frac{\partial^2 h}{\partial x^2} = a^2 h$ などから. 中間試験の 1. (2) を復習した人は、(4) で同じ間違いは繰り返さなかったはず.
- (3), (4) は、 $S = f^{-1}(k)$ の形のときは $T_{\mathbf{u}}^+ S$ の基底として $\text{grad}(f)(\mathbf{u})$ を取れることを使う.
- S は一葉双曲面の一部. (3) の解答例では複雑な積分を回避するため、 \tilde{S} を導入して Stokes の定理を 2 回使った. \tilde{S} や \tilde{l} の中に現れる “6” と “2” に意味はなく、 $\sqrt{2}$ より大きく 3 : 1 の比になる数の組であれば何でもよい. このようにしなくても、 $-\int_l \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$ を直接計算することもできるし、Stokes の定理を使わなくても、 $\int_m \mathbf{V} \cdot d\mathbf{m}$ を直接計算することもできる (例えば円柱座標 $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ を使うと \mathbf{m} をうまく取れる). ただし、これらの方法はかなり大変.
 $\partial_+ S$ を表す関数 $z = h(x, y)$ は最終的な積分値には関係しない (\mathbf{m} をある程度具体的に表示するには必要). h が r に関して単調減少であるという条件は、 S が弧状連結になるようにするためのもので、あまり本質的ではない.
- 0 以上の値を持つ連続関数については、積分値は 0 以上で、0 になるのは関数が定数関数 0 である場合に限られる. $\Delta f = 0$ は熱方程式と呼ばれる偏微分方程式 (の特別な場合) で、熱の分布が平衡状態にある様子を記述している. この問題は、 Ω 上で熱の移動がなく、 $S = \partial\Omega$ で温度一定であれば、 Ω 上いたるところ温度一定でなければならない、という (直感的には明らかな) 事実のベクトル解析による証明、と解釈できる. 詳細は「熱・波動方程式論」などで学ぶかもしれません.